

---

# シラクスの桜(ケラソス)

長塚 明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シラクスの桜<sup>ケラソス</sup>

### 【Nコード】

N0858P

### 【作者名】

長塚 明

### 【あらすじ】

時は紀元前2世紀、舞台はギリシア人の植民都市38ヶ国で構成されるマグナ・グレキア。冒険者たちは、【邪知暴虐のシラクス王デユオニスの打倒を目指す一派】と【マグナ・グレキアを統一した英雄王を守る一派】とに分かれて抗争中。

アレクサンドロスのマケドニア艦隊の侵攻をまえに、マグナ・グレキアは風前の灯！

さらには北方からせまりくるローマ共和国の脅威！

世界の均衡を覆し、マグナ・グレキアにカタストロフィーをもたらす謎のイベント「1 牧夫の王宮突入」とは？

突然、パーティ解散！？（前書き）

「もう君とは関わりたくない！」

とつぜん、セレーネーから絶縁を告げられた。

頭の中は真っ白……。

え？「【牧夫メロスの王宮突入イベント】の発生を阻止するクエスト」はどうするかって？

すいません、いま世界の運命を考える余裕はないのです。

自分のことで精一杯……。

これから、まず、次に、何からとりかかるべきか……。

突然、パーティ解散!?

セレーネー・カリエイスは憤然と告げた。

「もう君とは関わりたくない。口もききたくない。あっち行け! 死んでしまえ!」

頭が真っ白になった。そのままセレーネーは、後ろ姿に怒りをみながらせながら歩みさっていく。

「冒険者」たちが必死になって発生をくい止めようとしている謎のイベント

#### 【1 牧夫の王宮突入】

を目前にして、突然、パーティのパートナーから絶縁をいわたされてしまった。

クエストに失敗して命からシラクスの町にたどり着いて、抜け殻になっていた私。

「学院」で出会った若い学院生セレーネーにパーティに誘われて、やっと生きる気力が蘇りつつあった矢先だった。

何が?

どうして?

これからどうしよう?

首にかけるガウー（神符入れ）の中にいれたケラソスの花の絵。

つい先日、セレーネー・カリエイスがドラクム銅貨ほどの小さな紙にまごころこめて書いてくれたもの。

そのガウーを握りしめ、月を見上げながら呆然とすわりこんだ・・・

突然、パーティ解散！？（後書き）

前書きを整理しました。

## マグナ・グレキア諸国と学院（前書き）

今回は、おもに物語の舞台の説明です。

## マグナ・グレキア諸国と学院

私は「賢者」。いま、マグナ・グレキア諸国の中心都市シラクスの町のはずれにある「学院」に居候している。

賢者だったって、自分で自分を賢いと思っっているわけではない。そういう「職業」があるんだよ。ほら、自分や他のパーティ（PT）メンバーに、はげましのスキルをかけてやるクラス。

他のクラスには、剣や斧、メイスをぶんぶん振り回して肉弾戦を行う「戦士」、5種の属性の魔法を駆使して遠距離攻撃する「魔法使い」歌や楽器演奏で味方のHP（体力・ヒットポイント）やMP（精神ポイント）を回復したり、人形や肖像画をつくって味方に白魔術、敵に黒魔術をかける「アルティスト」などがある。「賢者」のスキルは、APやMPの総額を増やしたり、他のPTメンバーがつかえるスキルの種類を一時的にふやしたりできる。ありがちのマンネリな設定だから、これ以上、詳しい解説はいらないだろ？

「学院」というのは、マグナ・グレキアの諸国が共同で設立した学校で、マグナ・グレキア全土からあつまった勇敢な若者たちに「冒険者」としての訓練をほどこし、優れた戦士に育てあげることが目的としている。冒険者たちは、「クラス」を選び、仲間とパーティ（PT）を組んで数々の「クエスト」を消化しながら経験値を挙げていく。学院生は、クエストの実行にあたり、入門当初は学院から手厚いサポートをうけ、レベルがアップしていくにつれ、次第に自立して行動できるようになっていく。

マグナ・グレキアというのは、シケリア島と、対岸のカラブリアに分布するヘラス人の三十いくつかの都市国家をまとめて呼ぶときの

名前で、イタリア半島の原住民のエトルリア人が名づけた呼び名だ。

シラクスは、シケリアの東岸に位置するそんな都市国家の一つで、ヘラスのことではホントは「シユラクサイ」というのが正しいんだけど、この文章を読んでくれる奇特な諸君の多くは太宰治の小説によって「シラクス」の名前のほうになじみがあるだろうから、以下この名前をつかう（ただし、シケリアは、おなじように「シチリア」の呼び名のほうが有名なんだが、この呼び名はアメリカやイタリアのマフィアの首領たちの故郷ふるさとというイメージが強すぎるので、こっちはつかわないことにする）。

シラクスはデュオニス王が位についてから、急速に勢力を拡大した。彼は知略と武勇にすぐれた王で、まずマグナグレキアの諸国を服属させたのち、シケリア島のフェニキア人と、イタリア半島のエトルリア人の征服にとりかかり、大帝国を築きつつある。ヘラス本国の諸国家を制圧したアレクサンドロス大王がマグナ・グレキアに送り込んだマケドニアの大艦隊を撃破したのも彼の功績だ。しかしながらデュオニスは、マケドニア軍を撃退したところから、急に猜疑心をふかめ、王族や側近を次々と粛清しはじめた。

読者諸氏も、太宰の小説でみたよな？

デュオニスがシラクス市内で戒厳令を布告し、疑わしい者たちを手当たり次第に弾圧し始めたことを。

まず、妹婿。そして嫡男の王太子。妹。妹の子供たち。王妃。忠臣のアキレス……。そして有罪・無罪の人々を次々と逮捕・処刑し、武力と恐怖によってシラクス市を暗黒の支配下においた。

デュオニス王を打倒しようという、心きよらかな人々の活動は、困難をきわめた。

邪悪な恐怖の独裁者が誕生したことについて、学院は、かならず

しも敏感ではなかった。

その原因は、まず、学院内でシラクス出身者が占める割合がすくないこと。

すでに述べたとおり、学院はマグナ・グレキア諸国の共同設置で、理事会も教授会も、院生たちも、シラクスの出身者はむしろ少数にしかすぎない。シラクス王デュオニスが自国の側近や市民にたいして開始した恐怖政治を、まだ他人ごとのように眺める空気がある。

つぎに、デュオニス王による征服活動への評価。シラクス市によるマグナグレキア諸国の征服について、征服された諸国の人々は、かならずしも「デュオニスの侵略はけしからん！自由と独立の回復を目指して戦おう！」とはなっていない。シラクスに従属することになった各国では、政治家や宗教界、商業・産業界など角界のそれぞれで、デュオニスの引き立てによって旧来の支配階層に取ってかわることができた者たちが多数いる。マグナ・グレキア世界を統一した英雄として、むしろ彼を賛美する人々さえ、かなりの数をしめているのだ。

学院はデュオニスの本拠地であるシラクスにあるので、理事会も教授たちも院生たちも、内心がどうであれ、全員が、公式にはデュオニスに万歳をとなえ、徳の高い聖人、信仰の篤い厚徳の人とたたえることを余儀なくされている。だから、冒険者になろうと学院の門を叩いた若者は、まず、ひとりのこらず「デュオニス万歳」をさげぶ教授や先輩院生たちにむかえられることになる。

正義をもとめる冒険者は、まず最初に、いきなり命がけて、だれが「正義派（反デュオニス派）」で誰が「デュオニスの狗（<sup>イヌ</sup>親デュオニス派）」であるかを慎重に見定めていく必要があるのだ。

## マグナ・グレキア諸国と学院（後書き）

第2回のタイトルを改題しました。

## 冒険者の白・黒とラスボス・デュオニス王（前書き）

冒険者は、レベルがあがっていくと、いずれデュオニスを守護する「黒戦士・黒魔道師」か、デュオニスを倒して正義の実現を目指す「白戦士・白魔道師」のいずれかを選択する瞬間がやってきます。悪に仕えて目先の安楽を求めるか、弾圧を受けながら正義を貫くか、究極の選択！

## 冒険者の白・黒とラスボス・デュオニス王

学院に入門した冒険者たちは、クエストを消化し、さまざまな職業<sup>クラス</sup>を経験しながら、次第にレベルをあげていくことになる。

冒険者が最初に遭遇する選択が、Lv.20のときにおこなう「職業<sup>クラス</sup>」の選択であり、つぎの選択が、「白い陣営」、「黒い陣営」のいずれを選ぶか、という問題となる。

各クラスの詳細については、「あとがき」部分を参照していただきたい。

冒険者たちは、クエストを受諾し、ミッションをすすめていくなかで、いくつかの「分岐点」にであう。そのとき何を選択したかによって、冒険者たちは「悪の陣営」、「正義の陣営」にわかれ、白戦士・白魔導師と黒戦士・黒魔導師となっていくのだ。なにが正義・白でなにが悪・黒かという点、むろんデュオニスを倒そうとするか、まもろうとするかを指す。

前回も述べたように、学院ではすべての教授と院生が表向きは「デュオニス万歳！」を唱えているので、なにも考えずに取り組みやすそうなクエストばかり選択していると、そのうちに知らぬ間に悪・黒の陣営に所属することになってしまう。そのうえ、黒の陣営の冒険者に呈示されるクエストには【Lv. のむほん人 名を捕まえる】というものがあり、こっそりと反デュオニスだと名乗って接触してくる者がじつは黒の陣営のメンバーであるなどは、非常によくあることである。ゆえに白・正義の陣営に加わろうとする者は相当の注意が必要だ。

現在、存在がひろく知られているエンディングのシナリオとしては、

【邪知暴虐のラスボス・デュオ二スの打倒に成功！】と、【英雄デュオ二ス王を暗殺者集団から守りきる！】の2種がある。そして、現在デュオ二ス王の治世が続いていることでもわかるように、黒の陣営が勝利をかさねつづけている。

白の陣営は失敗を重ね、たいへんな数の犠牲も出したが、生き残りが断片的に持ち帰った情報が陣営に集積され、クエスト全体の概要はかなり明らかにされつつある。小ボス、中ボスはどんな連中か。あらかじめどんなアイテムを用意しておかねばならないか、など。。。

デュオ二スを打倒すると、一体世界はどのようにかわるのか？

それはまだ誰にもわからない。

新たなクエストが急にあらわれ、あらたなエンディングシナリオが知られるようになっていくのだと思う。

さて、私自身のことには話を移そう。

いまから10年以上前のことであるが、白の陣営に属する冒険者たちが総力を結集してデュオ二スの打倒に立ちあがったことがあった。複数のパーティが力をあわせてラスボス・デュオ二スに挑戦としたのである。私は、下っ端の「賢者」としてこの壮挙に加わっていた。

ひそかに、慎重に仲間があつめられ、20ものパーティが組織された。しかし黒の陣営のスパイたちがわれわれの警戒をかくぐり、パーティメンバーにもぐりこんだのである。かれらはミッションの真つ最中、ジャイアント・モンスターや小中ボスと激しく戦っているさなかに正体をあらわした。いくつものパーティで、パーティ・メンバー同士がモンスターそっちのけでバトルをはじめ、いくつものパーティが潰滅してしまった。

白い冒険者たちは、ラスボス・デュオニスとの戦いのまえに、スパイ達をすべて倒すか、追放することができたが、犠牲は大きかった。ミツシヨンを続行可能な仲間であらためてパーティを編成しなおしたが、9つのパーティしか編成できなかった。

冒険者たちはデュオニスの使い魔や中ボスたちの抵抗を排除しながら、デュオニスとの最後の決戦に臨んだ。しかし人数不足がたたり、デュオニスの打倒は成功せず、九つのパーティはひとつのこらず潰滅した。多くの仲間が死ぬかひどいケガを負い、生き残ったものたちはケガ人を抱えて必死の思いで逃亡した。

生き残った仲間のほとんどは、「冒険者」をやめてNPCになつてしまった。いま、町外れの村々で見かける農夫や木こり、羊飼いや鍛冶屋、商人の中にはこの時の仲間が何人が混じっている。

しかし私の場合、学院で修行している間に、家業は弟が継ぎ、もはや割り込む余地はなくなつてしまった。行きにかけた3倍の時間をかけてのろろとシラクスの町に舞い戻り、学院の師匠や院生の同期たちに助けられながら、抜け殻のようにすごした。

シナリオも後半にはいると、パーティは学院にもどることなく次々とあらたなクエストをこなし、冒険者は最後のレベルアップにいそしむ。私が身につけたスキルや呪文の中には、学院の教授たちも知らないようなものがいくつもあり、修羅場をくぐったから、各クラスの連携についても実践的な知識がある。学院の恩師たちは院生に知識や経験をつたえるアルバイトをあてがってくれ、かろうじて糊口をすすぐこととなつた。

セレーネー・カリエイスと出会つたのは、このような状況のときで

あつた。

## 冒険者の白・黒とラスボス・デュオニス王（後書き）

### 戦士クラス

ウォーリアー：鍛え上げた強靱な肉体を武器として最前線で戦う。

使用武器：

- ・ブレード（両腕で振り回す大型の剣）
- ・ソード（片手であやつる細身の件）とシールド（盾）のセット
- ・アックス（戦闘用の大型の斧）
- ・メイス（戦闘用の大型のトンカチ）

チェイサー：超人的な瞬発力で、反撃する余地を与えずに敵を倒す

使用武器：

- ・長弓（敵の攻撃がとどかない遠方からのアウトレンジ攻撃）
- ・ボウガン（強烈な貫通力で、敵のヨロイ・盾・シールドを撃ち抜く）

・ダガー（暗殺者の友人である鋭い短剣。投げてよし、刺してよし。）

ウィザード：魔法使い。強い精神から生み出される魔法の力で敵をねじ伏せる

使用武器：魔法を発動する触媒（しやくばい）としての杖。

このクラスは、火・水・地・風・雷のどの属性の呪文を充実させていくかの選択が重要。

### 魔道士クラス

#### アルティスト

使用武器：

・のど。味方をはげまして体力を回復させる歌声の力を生み出す重要な武器である。

・アウロス（指で穴をふさいで音程を変更する管楽器）味方の精神力を回復する音楽を奏でる。

・バンパイプ（長さの異なる管を吹き分けて音程を変更する管楽器）味方の精神力を回復する音楽を奏でる。

・ライアー（竖琴）弾き語りにより、味方の体力と精神力を同時に回復。

・キターラ（ギターの祖先）これも弾き語りにより味方の精神力と体力を回復。

・スティック。地面などにすばやく敵や味方の肖像画を描き、敵にダメージをあたえる「黒呪い」や味方を回復させる「白呪い」をかける。

・指。粘土ですばやく敵や味方の塑像を作成し、「白呪い」や「黒呪い」をかける。

## 賢者

使用武器：「叡智の書」

アルティストが、失われたHPやMPを「回復」するのに対し、賢者は5%、10%、20〜40%と、その総額を増やす。

レベルアップした後で使えるようになる呪文やスキルを現在のレベルで使えるようにさせる。

あるいは賢者のサポートがあるときのみ特別に使える呪文・スキルなどもある。

## 敗残の日々とセレーネーとの出会い

前回でも述べたように、10年前、わたしは下っ端とはいえ「白の陣営」に属し、デュオニス打倒のミッションに挑戦し、無惨にも失敗した。それなのになぜデュオニスの本拠地であるシラクスの町でこのうとうと暮らしているのか、その事情を以下に述べよう。

エンディングに到達して帰還した冒険者は、「成就者」（じょうじゅしゃ）の称号を獲得し、栄光の地位が約束されている。特に難易度の高いエンディングに到達できたものは「大成就者」（だいじょうじゅしゃ）として尊崇をつける。前回もふれた【デュオニスの打倒】と【デュオニスを暗殺者から守る】という2種のクエストは、デュオニス王が暗黒の独裁者と化した時期からほどなく、セツトで存在が知られはじめた「大成就者」級のクエストである。白の冒険者はソロパーティーで2度、連合パーティーで1度、前者に挑戦し、いずれも失敗した。彼らを妨害する側にまわった黒の冒険者たちは、「大成就者」の名とともに、デュオニスより多くの褒美をさずかり、シラクス政府の高官や高級顧問に取り立てられている。

冒険者たちの中には、難易度の低いクエストでエンディングをむかえ、「小成就者」になるよりは、大クエストに参加する機会を待って、「冒険者」のままにいるものも多い。また、この世界では、クエストに失敗してボロボロになってシラクスにもどってくる冒険者の姿はありふれた存在である。小エンディングのクエストは失敗してもパーティーが全員無事帰還できるようなものも多く、そのような者たちは、けろつとして、次なる挑戦のため、訓練や仲間あつめにいそんでいる。ただし白の陣営に加わった者はもはやお尋ね者であるので、クエストに失敗した生き残りは、通常は、町の周辺の森や農村に潜伏し、市内には足を踏み入れず、学院に戻ってくることに

もない。

私の場合は、コソコソしないで堂々と（正確には、意識朦朧<sup>せいちゆう</sup>として呆然と）町にもどったので、それがかえって良かったようだ。もういっさい何をやる気もわいてこなかったため、場末の宿屋で何ヶ月も無為に日々をすごした。その間に白の陣営をなめる使者から何度か誘いを受けたが、すべて断った。使者の何人か（あるいは全て？）はデュオニスのスパイだったはずである。やがて役立たずと思われるのか、当局が人畜無害の人間だと判断してくれたのか、けっきょく逮捕投獄されることもなく、政治がらみの接触がくることもなくなった。

恩師や、教授となった同期たちが、アイテムや錬金素材を切り売りしながら飲んだくれて寝るだけの私をみかねて、学院での仕事を<sup>あつせん</sup>斡旋してくれたことは前回でも述べた。学院は、もうすぐ学院から自立してミッションに取り組もうという優秀な院生たちに、給与を支払って初級・中級の院生たちに各種の知識や技術の指導を行わせているが、彼らと同じ扱いである。

私が属している「賢者」というクラスの場合、旅の間に自分が覚えたりスキルや呪文の知識を整理して書物にまとめたなら、そのできばえに応じて、さらに2、3段階ランクが上の「招聘学者」（しょうへい・がくしゃ）の待遇を受けたり、場合によっては教授として招かれることすらできるはずである。しかしながら、そのような作業にとりくむ気力がまったくわいてこず、学院での待遇が院生と同格のアルバイト扱いなままであることも、どうでもよかった。

このようにして、自分の知識や技能を深めることもまとめることもせず、かつて白の陣営に下っ端の立場で参加したときから冒険者としてほとんど進歩しないまま10年間をすごした。

私が受け持つ院生の多くは、自分たちの役にたつ技能や知識をそれなりに持っているというところで私の指導をいやがりもせず受けてくれているが、たんに学院のルーチンワーク、カリキュラム上、自動的に担当となった人としか見ていないはずである。「師」として、あるいはひととして尊敬をしてくれる人はなかったし、そのようなことを期待もしていなかった。

セレーネーはちがった。

シラクス郊外の森の中での実践演習を終えたある日、冒険者としていつか最終ミッションのどれかに挑戦するときには、同じパーティーで「賢者」をつとめてくれないかと、さそってきたのである。

それまでミイラのように生きながら死んだような状態であったのが、一挙に蘇ったような気がした。

必要とされることは、なんと嬉しい、幸せなことか。

今の自分がもっている知識や技量は、セレーネーが初級・中級の院生である間なら十分に有益だけれども、上級段階以降で必要とされるものがいちぢるしく欠けている。「賢者」としての、また、冒険者としてのオノレをまずたてなおそう、と決意した。

## 敗残の日々とセレーネーとの出会い（後書き）

セレーネーから「真の名」を示されるエピソードを、「賢者」に誘われてから10ヶ月ほど後に変更し、それにともないこのエピソードを次回に移動するよう変更しました。

## 「真の名」と信頼

それから10ヶ月あまり、セレーネーと共にいくつかのクエストと一緒に消化する日々がつづいたある春の日、セレーネーは自らの「真の名」を私に示した。

「真のことば」で「ミニーネル オドソル（我が名ハ「輝キ」ナリ）」と。

たいへんな信頼である。心臓がひっくりかえるほど驚いた。

以前に参加した白の陣営のミッションでも、ともに行動する仲間とは命を預けあつたが、このミッションではまず「白の陣営のメンバー」として評価・判断されていたのであつて、個人として信頼をうけたわけではない。

「真の名」を明すほどの深い信頼を示してくれる相手にであつたのは生涯ではじめてのことである。

「真の名」とは、「真のことば」によつて名付けられた、その人固有の「真実の名」であり、男子は6才、女子は7才の夏至の日に「名付け親」から授けられる（高い精神感応力をもつ魔導師に「発見」してもらつ、と言い換えることもできる）。神々に願いを捧げる時など、心の中で神に語りかける時に自称として用いるが、日常生活で一般に使用することはない。きわめて秘密性が高く、通常は、友人はむろん親兄弟や妻子など自分の家族にすら明かすことはない。なにかの拍子に敵対者に知られ、呪いでもかけられたなら致命的なダメージを受けるからである。

「真のことば」は、太古に大地を海中から持ち上げた神々が用いたとされる言葉で、人間が魔法や呪術をかけようという場合に用いられる言語である。ヘラス語（ギリシャ語）をはじめ、現在の世界各国で人々が用いていることばは、この「真のことば」が訛り、崩れたもので、これらを用いて魔法・呪術をかけようとしても、ほとんど効くことはない。

魔法・呪術にかならず必要なのは「真のことば」を用いることであり、「真の名」ではない。「真の名」のかわりに普通名詞をもちいても、それなりに魔法・呪術はかかる。たとえば、そのへんの足もとにおちている石ころを魔法を使って放り投げる場合、「石」の普通名詞である「タシユ！」という呼びかけを用いて十分に目的を達成することができる。あるいは冒険者どうしがバトルする場合なども同様である。たとえば雷撃をくわわせる場合「ワガ聖ナル雷ヨ！いかづち」と「真のことば」で唱えることになるが、

にあたるターゲットの呼び方は、「テル カラ フン（この黒き衣の者）」とか「ヘラス ヘレル メロス ゲデク テル フン（ギリシャ語でメロスと称するこの男）」という単語で代用しても、ハ、○○○〜九、○○○とか、クリティカルが出た場合には一、○○○など、けっこうなダメージを与えることができ、これで十分にバトルは成立する。

これがもし の部分に「真の名」が入るものなら、ターゲットが受けるダメージは、即死級のものとなる。

冒険者たちは、ミッションの実行中、パーティ仲間と互いに命を預けあう関係をもつが、それでも、基本的には「真の名」を仲間告げることはない。その後のクエストで敵・味方にわかれることもありうるからだ。

医師は技量を尽くしたのち、神に対して治療の成功を祈る「神頼み」を行う関係で、他人の「真の名」を多数知る職業のひとつである。かつてデュオニスは、「謀反人（＝白の陣営のメンバー）」を治療した場合に患者の「真の名」を報告するよう医師たちに求める法律を制定しようとして失敗したことがある。

現在のシラクス市政府の医療長官は、医師たちにデュオニスのための密告制度をおしつけ、治療をうけにきた冒険者たちの情報をあつめる体制を作り上げた功績で今のポストを獲得した男で、この諜報網に引っかけた命を落とした白の冒険者は数しれない。そんな男が、「冒険者の情報の密告と、冒険者の「真の名」の名の密告は、全く質の異なる問題です！前者は医師たちに王への忠誠心の有無や程度を問うだけですが、後者は医師たちに人の道を踏み外すよう強いるものです！」と、デュオニスのこの法案に猛反対したのである。

「私がつくりあげた医師の密告体制は、デュオニス様ご1代にのみご奉仕するためのもので、デュオニス様が神に召されるとともに、跡形もなく消滅する性質のもの。それに対し、この新しい法律は、医者という職業への信頼を徹底的に失墜させ、その悪影響は後世に何世代ものこってしまふ。だからこんなものを許すわけにはいかない！」と、マグナ・グレキア中の医師によびかけ、法律を撤回せねばすべての医師が医療活動を放棄する！とデュオニスに迫ったのである。

デュオニスの狗とさげすまれているこの男にも、彼なりの、医師としての倫理感があるのだなあ・・・と評判になった。

「真の名」とは、じつにこのようなものであり、世間では、他人の「真の名」をひとつも知ることなく生涯を終える人が大部分である。そのようなものを他人に告げることは、とてつもなく強く、深い信

頼を相手に示すことになるのである。

冒険者として、信頼できる仲間と巡り会うことは大いなる幸せである。

セレーネーから「真の名」を示されて、うれしさのあまり天にも昇る心地で舞い上がったことはいうまでもない。

ところがその翌日になるとセレーネーの態度は一変しており、それからさらに数日ののち、第1話で述べたように、わけもいわずにいきなり、突然、絶縁を通告されてしまうのである。

「真の名」と信頼（後書き）

- ・デュオニスの医療長官のエピソードを追加
- ・セレーネーが「真の名」を告げてから態度が豹変するまでの時間の経過を修正

いかに生きべきか（前書き）

「セレーネーの真意」を全面的に改稿したものです

## いかに生きべきか

……と、以上で回想はおわりだ。

セレーネーと交わした最後の会話が第1話で紹介したような内容で、それから半年以上がたってしまった。

「真の名」を教えあつた次の日にとつぜん始まったセレーネーの態度の激変。

セレーネーの人柄からしたら、おれの「賢者」としての技量が信頼できなくなったのならば、そのように説明してくれるはずだ。それが、ゴミを捨てるかのように、わけも告げずに切り捨ててくるのはおかしい。

セレーネーが書いてくれた桜ケラッスの絵。

セレーネーが反故紙に書いた古代の英雄たちのラクガキを記念にもらっていたのだが、あるときカルパイをこぼしてよごしてしまった。もういちど何か描いてくれないか、と頼んだら、40分もかけて書き上げてくれたのが、この桜である。彩色された本物ソックリの桜の一輪と花びら一枚。

この時セレーネーがほんとうにおれを信頼してくれていたことは、ゆるぎがない。

それがあの日を境にいきなりゼロを通り越してマイナスの極地にまでいたってしまった。

この人が激しくおこつた様子を見せたからには、実際に、本当に激しく怒っているに違いない。

自分に、何かそれだけの落ち度があるはず。

セレーネーから「真の名」を告げられたその時、自分がなにを話し

たのか？

この小説を書くために改めて思い出そうとしたら、奇怪なことになぜか脳に霞がかかったようになっていて、クツキリとは出てこないのであるが、

「ぼくのような者のいつたいどのあたりを見込んでくれたのか？」

「ぼくがほしいのは、支え合うパートナーだ。君にはまだ何年もかかるな」

「ぼくが君の「賢者」にふさわしいか、じっくり時間をかけて観察してほしい」

そのようなことを話した記憶がある。

いまになってわかってきたけど、となると「次の日」ではなく、「真の名を教え合ったその日」のことであるな。

セレーネーを大変に失望させてしまったのは……………。

こんなことを言ったのは、自分がダメ冒険者として10年も無為に過ごしていたという卑下や、「セレーネーは自分をとてつもなく過大評価しているのではないか」という不安があつたとおもう。

しかしこれらは、セレーネーの、おれを「賢者」として誘うという判断や、「真の名」を伝えて信頼を示そうという決断に、疑問や不安をつきつけることではなかったか？セレーネーのおれへの評価や真心、信頼をぜんぜん信用していなかった。

「大成就者」級のクエストに挑戦し、それからさらに10年のキャリアを積んだ冒険者。そんな冒険者なら当然そなえていて当然な力量が、今の自分にはない。数年後に来る出撃の時。君の信頼に応えられるかどうか、とても不安なんだ。

君がおれを自分の「賢者」に選んでくれた選択は必要とされる喜び、

「真の名」を知らせてくれたことは信頼される幸せをくれるものだ。これに疑問をもったり否定したりするつもりは全然なかった。あの時は、君がよせてくれた信頼の深さ・強さがまぶしすぎて、ただ不安だったんだ。

\*\*\*\*\*

学院では、有志により不定期で文芸誌が発行されており、古代の英雄たちの活躍を現代的にアレンジした物語や詩、小説などが掲載されている。セレーネーはここに短編・中編・長編の物語を載せている常連である。

あの日（第一話参照）から、数ヶ月後すぎたある日。

バックナンバーに載っているセレーネーの文章をなにげなくみていて、「まえがき」や「章のタイトル」などに、おれに対する呼びかけに思える文章や語句をいくつもみつけた。

セレーネーは、あの日からかなり過ぎてからも、まだおれを待っていてくれた。

あるいは試してくれていた。

おれはそれに応えられなかった。

あの日に見限られたと思い込み、ただ嘆くだけで無為に時を過ごした。

いまなすべきことは、すみやかに冒険者としての己おのれを立て直すこと。不利なバトルで敗北が必至になった場合に、パーティメンバーの全員を生還させるだけの力量を身につけること。

それができたら、堂々と、君のパーティーの「賢者」にしてくれるって自分からいえる。

その時、セレーネーがまた受け入れてくれるかどうかはわからない。

すでにとつくに最後の冒険へと旅だつてしまっていることもありえる。

おれの手元には、セレーネーが精魂込めてかいてくれた桜ケラッスの絵がある。

この人が真心込めて書いてくれた、宝物だ。

もうとなりに戻れないとしても、セレーネーの幸せと冒険の成功を願おう。

そして、もしセレーネーが困っている場面にあつたときには、力のかぎり支えになろう。

## 新しい仲間（前書き）

主人公のモデルの人は、リアルでは、セレーネーさんと再びこころを通わずことに成功していません。

せめて小説の中くらいは幸せになってもらうことにし、途中経過は省いて、今回いきなり、セレーネーさんといっしょに冒険の旅に出ることにさせていただきます。

## 新しい仲間

セレーネーが学院の文芸誌に自伝をのせた。相当なつらさをしよってきた人だと知った。いまの自分の力では、セレーネーが必要とする支えとなる力量がぜんぜんない。

第六話でも述べた、速やかに冒険者としての自分を立て直したい。そうしたら、セレーネーが必要とする項目の一つか二つくらいは担えるようになる。

自分にその準備ができたとして、セレーネーが頼ってくれるかどうかは、また別の問題であるが。とにかく自分を整えることに全力を挙げるしかない。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

それから五年がすぎた。

冒険者たちの間では、「牧夫メロスの脅威」がささやかれていた。

「牧夫メロス」とはいつたいだれなのか？

実在の人物なのか？

なにかの作戦のコードネームなのか？

確度の低いウワサだけはいく種類もながれてくるが、詳細は全く闇の中だ。

ヒツジ飼いも、「メロス」という名の持ち主も、このマグナ・グレキア諸国ではきわめてありふれた存在だ。「ヒツジ飼いであるメロス氏」も、各国ごとに、それぞれ十数人はいるだろう。

このウワサがひろまり初めてから、各国は「ヒツジ飼いであるメロス氏」たちに一斉に事情聴取をおこなった。デュオニス王のお膝元であるシラクスでは、読者もよくご承知の、石工セリヌンティウスの親友のあのメロスも取り調べを受けたが、なんの情報もでてこなかった。

黒の陣営に属するものたちは、名君デュオニスを脅かすなんらかの陰謀だと考え、備えを固め始めた。

白の陣営のものたちは、邪悪な独裁者による弾圧jを指すと考え、さらに自分たちの行動を秘匿した。

白の陣営と黒の陣営の暗闘がはじまった。（続きます）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0858p/>

---

シラクスの桜(ケラソス)

2011年10月6日23時08分発行